

LITTLE BIG

第80号 2025.12



発行:福島県立図書館 こどものへや
〒960-8003 福島市森合字西養山1番地
TEL 024-535-3218
<https://www.library.fcs.ed.jp/>



【ごあいさつ】-『LITTLE BIG 準備号』より-

この『LITTLE BIG』は、「子どもだけど大人」「大人だけど子ども」という人たちへのメッセージです。図書館の司書たちが読んだ本の中から、気になる文章をピックアップしてお知らせします。みなさん的心のアンテナにひっかかったら、ぜひその文章が載っている本を読んでみてください。



【 Pieces - かけらたち - 】 本の中の言葉

当館の職員が読んだ本の中から、素敵な言葉、心に残った言葉を集めました。
みなさんの心にも届いたら、ぜひ手にとって読んでみてください。



『好き』を心の真ん中において、大事にしていいと思う。私は好きなことをずっとやってたら、大切な友達に出会えたんだ』

『あの子の隣で待つ春は』(上田聰子／作 米田絵里／絵 文研出版 2025.2 p203)



「ものごとは必ずしも見かけどおりとはかぎらない。それは、人間にもあてはまるの」

『メイジー・チェンのラストチャンス』(リサ・イー／著 代田亜香子／訳 作品社 2025.1 p175)



「笑わせておけばいい。ばかなハイエナたちなんだから」

「ハイエナって、何？」

「群れになって走って、ほかの獣が殺した獲物を食べる獣だよ」フェリクスさんは、怒りをこめて言った。

「笑うような声で鳴くんだが、自分たちが何を笑っているのか、知らないのさ」

『木曜生まれの子どもたち(上)』(ルーマー・ゴッテン／作 脇明子／訳 網中いづる／絵 岩波書店 2025.1 p221)



だって、インターネットなんか見ていたら、大事なことを取りこぼしそうじゃないか？

日々変わっていく季節のうつろいとか。目の前にいる人の笑い声とか。窓から見える、星のまたたきとか。

『この世には生きる価値がある』(長谷川まりる／著 ポプラ社 2025.6 p59-60)

全国では熊に襲われる被害が相次ぎ、環境省の発表によると、2025年度の熊による死者数は、過去最多だった2023年度の6人を上回り、13人(11月20日時点)、被害者数も同様に過去最悪の件数を記録しています。

この被害数の増加に伴い、今年9月には鳥獣保護管理法が改正され、危険鳥獣(熊など)が人の日常生活圏に侵入し、緊急性の高い場合には、市街地でも猟銃の使用が可能になりました。

それはそうと、そもそもなぜ熊などの野生動物が人里に降りてくるようになったのでしょうか？また、私たち人間はこれからどのようにして他の生き物たちと共生していくべきよいでしょう？近年重要視されている「生物多様性」について考える本を紹介します。

『野生動物は「やさしさ」だけで守れるか？』
朝日新聞取材チーム／著
岩波書店
2024.7 480/A7

『はじめての動物地理学』
増田 隆一／著 岩波書店
2022.10 482/A7

『2050年の地球を予測する』
伊勢 武史／著 筑摩書房
2022.1 519/I

＼YAの本棚から／

中高生のみなさん(YA)のためのコーナーから、おすすめの本を紹介します。

ぼくのシェフ

長谷川 まりる／作 西松 ツチカ／絵
くもん出版 2025.7【913/ハ】



レストランを経営する有名シェフを父に持つ少年、シャール。ある日、慈善団体の炊き出しに参加したシャールは、貧民街に住む少年、アズレと出会います。炊き出しのスープに手を加えて劇的に美味しくしたアズレの才能に驚き、文字や料理を教えることにしたシャールですが、あることがきっかけでふたりは疎遠になってしまいます。数年後、「食死病」という奇病で父が亡くなり、シャールがレストランを継ぐことになりました。人手不足の中、アズレを訪ね、一緒に働いてもらうことにしたのですが…。

共に働く料理人たち全員が感じるアズレの才能。そこにはある秘密がありました。

灰とダイヤモンド

東 曜太郎／作 中島 花野／絵
岩崎書店 2025.6【913/ヒ】



1946年、敗戦から二度目の夏。東京・新橋駅前の建物は、崩れかけ、灰と塵で埃っぽく、疲れた顔の復員兵や物乞い、浮浪児が行き交っています。その駅から南西に広がるヤミ市を14歳の衛が彷徨っていました。衛は繊維問屋を営む裕福な商家の生まれです。しかし戦争で家族は崩壊。穏やかだった父は戦地での悲惨な体験で別人に変わり、母は書置きを残し、姿を消します。家出してヤミ市に流れ着いた衛は、浮浪児をまとめるリーダー格の八郎に一目置かれ、ある計画を打ち明けられます。ヤミ市に出回る出自不明のダイヤの出所を探り、それを元手に人生を変えるというのです。衛は夢と罪の間で揺れ動き、必死に未来を掴もうとしますが…。

コーリヤと少年探偵団

柳 広司／作
理論社 2025.5【913/ヤ】



コーリヤの住む町で殺人事件が発生。被害者は町の誰もが知っている「カラマーゾフ家」の当主で…。

実はこの本、ドストエフスキイの有名な文学作品『カラマーゾフの兄弟』を、登場人物の一人である13歳のコーリヤの視点から描いたものです。『カラマーゾフの兄弟』を読んだことがなくても、ちょっとクセのある少年コーリヤや元の本の主人公アリョーシャ、町の少年探偵団たちの友情物語として楽しく読めます。

もちろん、これをきっかけに長大な原作に挑戦しても良し。この本自体はとても読みやすいので、気軽に手に取ってみてください。

閉じこめられた「森の人」

ミッキエル・カダルスマン／著 村上 利佳／訳
あすなろ書房 2025.5【933/ガ】



インドネシアで私立学校に通うマリアは、絶滅の危機に瀕しているオランウータンをたすけるため、学校で嘆願書への署名を呼びかけました。マリアの嘆願書は周りの人を巻き込んだトラブルに発展してしまいます。

一方、家族の住む村を離れ公立中学校に通うアリは、おじの店を手伝いながら生活していました。ある日、チーズの試合で訪れた学校でマリアの嘆願書を受け取り、オランウータンを飼うことは違法だと知り戸惑います。おじの店には、オランウータンのジンジャーがいて、アリが世話をしていたのです。

全く異なる家庭環境の二人の中学生・マリアとアリ、そしてオランウータンのジンジャーの三者の視点で語られる物語です。